IN SOUL OF

花と種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＮ　ＳＯＵＬ　ＯＦ

【Ｎコード】
Ｎ３８５４Ｃ

【作者名】
花と種

【あらすじ】
ただ彼は、霊感が強く霊が見えた。ただ彼女は、ほんの少し霊感があっただけ。そんな彼らは、未知なる世界へ、冒険の旅へ、人生は一度きりなんだ・・・誰だって大きな冒険をしてみたいと思った事はあるはず。（たぶん・・・だったら一緒に冒険しようぜ！

～第一話～事の始まり

こんな冒険望んでいなかった。
でも、俺にしかできないのならやるっきゃない。

４月４日８時４５分　始業式のため学校に登校

俺、五月太陽年・・・１４歳

「チッ　めんどくせー」

俺の幼馴染、松下花梨

「こらっ　太陽　そんなこと言ってるとまた、親父さんに怒られるよ？」

太陽

「校長の話とかかったるくて、聞いてらんねー。おっ！やっと終わったか。」

趣味・・・音楽を聴くこと

薩摩先生

「うるさいっ！！」

ドコッ

太陽

「痛ってー　殴るこたぁねぇだろぉ！！」

俺より頭一つ分くらい大きい、体格の良い男の先生、薩摩琢磨が怒った

顔をして立っていた。

好きな食べ物・・・お好み焼き

薩摩先生

「もう終わるから黙って聞いてろ。」

太陽

「ちぇー。。。」

嫌いな食べ物・・・特になし

花梨

「ぷぷぷ・・・」

太陽

「わっ笑ってんじゃねぇよ!!」

薩摩先生

「うるさいっ!!」

ドゴッ

太陽

「うぎゃー!!」

特技・・

花梨

「あー終わった終わった、教室戻ろっ」

花梨の友達

「うんっ」

・霊視

９時２０分
ー教室ー
太陽
「あーくそあの教師　教育委員会に訴えんぞ。」
薩摩先生
「なんか言ったか？」
太陽
「あっいえ　なんでもありません。　ってかなんで　薩摩がここにいんだよ！！」
薩摩先生
「先生だろ？せ・ん・せ・い・・・でしょ？」
太陽
「はっはい（汗　薩摩先生」
薩摩先生
「よーし。さぁ皆早く席に着け！！　新任の先生を紹介する。先生どうぞ。」

教室のドアからは冷たく凍りつくような空気が、教室中に入りこむような感じがした。それを感じたのは俺だけだったかもしれない。
先生が入った瞬間時が止まったような気がした、いや止まっていたのかもしれない。
彼女の目は、霊と同じような冷たく凍った感じがしていた。
髪の毛もすごく長く、背丈も高かった。
爪も長く、手首には一周するアザがあった。
服装に関してはセンスが良かった。
棘霊仔（いばられいこ）

「棘霊仔です。よろしくお願いします。」
そして、冷や汗を流して固まっている俺を見て、ニコッと笑った。

ピキッ！！
関節がいっきにやわらぐような、関節を無理矢理折ったような感覚と共に、
体が楽になった。

クラスの皆
「好きな物何ー？」「がやがや」「結婚してんの？」「わいわい」
「歳は？？」
とやたら皆聞いていた。

薩摩先生
「ほらっ！！静かに。では、霊仔先生後はお願いします。」
そう言って薩摩は教室を去っていった。
棘先生
「はい。それではまず先生への質問などからにしましょうか？」
皆
「わーい」
棘先生
「先生が質問者を決めます。質問者は、花梨、龍、邪丸、そして太陽」

この時、運命を決められたような気がした。
なんで指名なのか、なんで俺達なのか、

太陽
「なーんで俺だけ　そして　なんだよ　そ・し・て！！」
龍

「お前は黙ってろっ、まず俺から質問させろ」
龍・・・石堅龍（いしがたりゅう）
身長は小さい方で小柄だ。運動神経はかなり良く、頭もさえている。

太陽
「ぁん！？」

ボコッ

太陽
「痛ってーー何すん・・」

龍が手を出してさえぎる・・・
その瞬間！！
音が消え去った。
周りの友達は皆固まっている。まるで、時間が止まっているかのように。

太陽
「なっなっなんだ！？」
龍
「！？」
太陽
「なっなんだよ？？」
花梨
「どっどうなってるの？？　ねぇ龍君」
邪丸（じゃまる）
「ｚｚＺＺ」
太陽

「なんで邪丸は寝てんだよ！！」

ドコッ

邪丸

「ん～？誰だよ今蹴ったのは？」

机で顔をうつ伏せにして寝ていたのは、繭泉邪丸（まゆいずみ　じゃまる）で何かと謎の多い、大きな体をした少年だった。

ムクッと顔を起こし、ボサボサの茶色い髪を掻いてまだ眠たげな顔をしていた。

俺より頭2、3個分くらいでかくて、力もかなりある。

龍

「お前達・・・まっ！まさか！！」

龍は手を出した。

手には青い火の玉のような物が浮かんで見えた。

太陽

「あっ！！」

花梨

「？」

邪丸

「んっ！？」

龍

「見えるのか？」

花梨

「え？」

その時、俺と邪丸は冷や汗をかいていた。

龍
「棘先生・・・てめぇ何者だ？」

棘先生
「やはり私の感じた霊感は合っていたようね。花梨はまだ、霊視まではできないようね。」

花梨
「！？・・・棘先生？？」

謎の女
「私は棘先生ではない・・・・久しぶりね・・・・龍・・・」

龍
「！？まっまさか！？　姫？ウルル姫？」

ウルル姫
「久しぶりだな。龍・・・これは緊急事態だ。スピリットワールドでダークソウル達が侵入してきた。」

龍
「なっなんだって！？　カマ爺がスピワード（スピリットワールドの略）の外にシャイン膜を張ったんじゃ？」

ウルル姫
「それがカマ爺が謎の失踪でな、失踪と共に膜が取れてしまったのだ。」

太陽
「まっ待ってくれ！？　話が何がなんだか」

花梨
「そうよ！？スピリットワールドって？？ダークソウルって？？」

龍
「いいから来てくれ。お前達にしかできない事なんだ。」

花梨
「え？何？何なの？」

邪丸
「黙ってついて行った方がいいようだな・・・だろ？」
太陽
「きましたきましたきました！！俺達にしかできないんだろ？やってやろうじゃねぇか！！」
龍
「ふっ。ウルル姫ＯＫです。」
ウルル姫
「わかりました。では、」

右手を前にかざし何か気を集めるような気がした。

花梨
「まっ待ってどういう事？」

パァー
大きな黒い渦のような、空間のようなそんなものが目の前に現れた。

太陽
「いいから行くぞ！！何やら冒険の始まりみたいだ。ホラッ！！」

ドンッ

花梨
「きゃっ」
９時２９分
全ての始まりはここから、ここから彼らの運命は大きく滑走路からハズれて行ったのであった。
その空間、渦の向こうは彼らはまだ見たことのない世界であった。

～第一話～事の始まり（後書き）

「ＩＮ　ＳＯＵＬ　ＯＦ～第一話～事の始まり」を読んで頂き本当にありがとうございます。
まだまだ、これから発展させていくつもりです。
太陽達の冒険を最後まで、読んで頂いたら幸いです。
今後もよろしくお願いします。

～第二話～スピリットワールド

―スピリットワールド―
3人は、ウルル姫、龍に従うがままに何処かを目指して歩いていた。
地には、砂のような青い粒が砂漠のように広がっていた。
天には、無限に広がる空があった。
太陽などはないが、月がずっと出ている。
とても殺風景（さっぷうけい）な土地であった，風が吹くたびに凍えるような寒さの冷気がきた。

ピュゥー

太陽
「うぅう！！寒い」
龍
「もう少しだ、我慢しろっ！」
太陽
「さっきっから　もう少しだ、我慢しろっ　ばっかじゃねぇかよ！？」
邪丸
「ちょっとぐらい静かにしろよ太陽。それと、龍さっきまで腰にそんな物なかったが、それなんだ？」
腰には、自分の身長なみにある細長い刀を提げていた。
龍
「ん？これか？」
龍は、腰に提げた刀を見せてくれた。

龍
「我流氷龍剣（がりゅうひょうりゅうけん）・・・この世界に来ると、自分の霊気が凝縮され物として自分の身に付く、
ほらっお前等気づかなかったか？」
邪丸
「え！？」
太陽
「なっなななんじゃこりゃぁ！！」
邪丸
「なっなんだそれ太陽！？」
太陽
「こっこれは、太刀？」
龍
「思ったとうりだ、でかいな、霊気を凝縮しき切れずかなりのでかさになる。」

太陽の背中にさしてあったのは、太陽より1．5倍ほどの大きな太刀であった、

太陽
「でけぇ、だけど、重さが感じられない、」
龍
「あたりまえだ、霊気を凝縮させただけなんだから。それはお前の一部同然だ。」
花梨
「と言う事は、太陽の一部って言うことか。」
邪丸
「なぁ、俺は？俺の霊気を凝縮させた物は？」
龍

「ソウルコンデンションだ・・・お前のコンデンション見当たらんな。」
花梨
「私のは、腰にあった。何だろうこれ？」
花梨が手にとってみせてくれたのは、細い針が入った筒のような物だった。
太陽
「針？」
龍
「千本針、治療、攻撃に優れていると聞く。治療は、ほらっ針治療とかあるだろ？
ツボをついて瞬時に傷を癒す。そして、攻撃には、敏捷性がある。
だが、
防御がないのが致命的だな・・・」
花梨
「防御・・・」
邪丸
「なぁ・・・俺は？」
ウルル姫
「さぁ着いたぞ、狩る者の村・・・ハンタービレッジだ！！」
太陽
「そのままじゃん！！」
邪丸
「てかっ！！俺のソウルコンデンションの話は！？」
龍
「黙って二人とも歩け！！」
ドコッ　ボコッ

太陽と邪丸
「んぎゃぁ！？」
花梨
「ははっ」
太陽と邪丸
「笑ってんじゃねぇ！」
龍
「黙れっ！」
ドコッ
太陽と邪丸
「チ――――――ン」

―ハンタービレッジ―
ウルル姫
「ここには、全ての狩る者が集まる。猟師、漁師等がな・・・」

ジロジロ

太陽
「なんかめちゃくちゃ視線感じるんだけど」
龍
「そりゃそうだそんな服じゃな、ここの世界の服をまず買うか。」
太陽
「おぅ！！」
邪丸
「俺は遠慮しとく、この村を歩きたい。」
龍
「わかった。この村は簡単な造(つく)りになっている、

北が魚市場、東が港、南が民家、西が酒場その奥に迷いの森がある。
いいか、迷いの森だけは行くなよ？一生出られなくなる。」
邪丸
「わっわかった。」
龍
「服はウルル姫のセンスで、俺は行くところがある。」
ウルル姫
「酒場か・・・」
龍
「はい。では後ほど。」

そう言い残し、龍は去って行った。

邪丸
「んじゃぁ俺も、また後でな。」
太陽
「あぁじゃぁな」
花梨
「ばいばーい。」
ウルル姫
「別れの言葉なんていいわい、この店だ。」

そう言って姫は店に入っていった。

看板には、「マッチとヨッチの陽気な洋服店」と長々しく書いてあった。
見た目はボロいが、色あせていないところを見るとかなり派手な店だった。
太陽

「こっここ？？」
そう言いながら二人も入っていった。

～第二話～スピリットワールド（後書き）

第2話を読んでいただきありがとうございます。
これからさらに太陽達と一緒に冒険しましょう。

～第三話～腕調べへ（前書き）

スピリットワールド略して、スピワードを歩いていた5人は狩る者の村・・・ハンタービレッジへ着いた。
邪丸と龍とは一旦別れ、
太陽、花梨は新たな武器を持ちスピワードの服を揃えるために陽気な洋服店へ来た。
今回はどんな物語が待っているのだろうか・・・

～第三話～腕調べへ

ーマッチとヨッチの陽気な洋服店ー
入ってすぐ右に洋服を作るための小道具が、棚の上に置いてあった。
左には、服が数枚だけ壁に掛けてあり、梯子(はしご)が立てかけてあった。
天井はすごく高い・・・と言うより、ないと言ったほうがいいかもしれない。まるで魔法のようにずっと奥までである。
壁は緑と黄土色の縦に縞模様で、ところどころに可愛らしい黄色い星のマークがあった。
部屋の広さは畳１０枚程度でものすごくせまい、前方にはレジがあるがなんだかそこにあるようでないような感じがした。

太陽
「こっここ？」

右にあった棚の上に腕を乗せて回りを見渡しながら言った。

花梨
「あっウッウルル姫　えっ！？あれっ？」

周りを見てもウルル姫の姿がなかった。
その時、上から男の子の声がした。

謎の男の子
「あれれー？？お客さんー？」

すごく長い梯子が立てかけてあり、５ｍくらい高い所に男の子がいた。
何やら服の整理をしていたようだ。その辺りにたくさんの服があっ

た。

太陽
「！？そっそうだけど」

謎の男と子
「帽子？服？ズボン？どんな感じの？？」

太陽
「んーじゃぁ　まかせるわ！！基本色黒ね。」

謎の男の子
「ＯＫ－！！　ちょい待ちー」

と言い梯子をうまく使って左右にスイスイ移動し服を集めて回った。

謎の男の子
「ほいっしょっと！」

５ｍほどある高いところからジャンプで降りてきた。
男の子は、金髪で目が青く右耳には、赤い宝石の入ったイヤリングをし、太陽より少し低く龍と同じくらいだった。茶色いブーツを履き、茶色い手袋をし、緑と赤の服と緑の半ズボンを履いていた。

謎の男の子
「こんなもんかな？　俺の名は、ケッシュ・マッチ　だ！！　マッチって呼んでくれ」

と自己紹介をし、集めた服を渡してくれた。

太陽
「あっありがとう　マッチ。」
マッチ
「奥に試着室あるから。」
と言い奥を指差した。
だが、奥と言ってもすぐそこにレジがある。

太陽
「え？」
マッチ
「あっお前らウルル姫の連れか？まぁとにかく奥行ってみろ、んでぇそっちの女は？」

花梨
「ええと　私は・・・」

太陽は不思議そうに奥に進んで行った。だが、進んでも進んでも進んでいる気がしない、後ろを振り返って見るとマッチと花梨が遠くにいた。

太陽
「なんじゃこら！？」
ウルル姫
「幻覚だよ！」
太陽
「！？ウッウルル姫」
右の壁にあった扉が開きウルル姫が出てきた。

ウルル姫
「ここが試着室だ。」
太陽
「そんなとこにいたのか、ん？服変わってないか？」
ウルル姫
「こっちの服に変えたのだ。どうだ？可愛いだろ？」
太陽
「全然！！」

ビシッ

太陽
「んぎゃっ！？」

青っぽい少し透明な長いワンピースのような服を姫は着ていた。

太陽
「痛てて・・・んじゃぁ俺も着替えてこよっと。」

そう言い扉の奥へ太陽は入っていった。

花梨
「これにするわ」
マッチ
「ありがとうございますぅ～、では、試着室の方へ。」
ウルル姫
「それにしたのか、見せてくれ。」
花梨
「！？ウルル姫！！どっ何処に行ってたの？？　服？私が着てからのお楽しみ～♪」

マッチ
「では、あちらです。　あっ！！お似合いですよ。ニコッ」

目の前に、黒いコートをはおっていて上着の裏は赤色で、銀色のチャックが首あたりから腹の下まであった。長袖を捲くっていて、黒いグローブを付けて長ズボンを捲くった感じのズボンをはいていた。背中には、大きな太刀をしょっている茶色と金色と赤色が混ざった感じのする髪の毛をした太陽が立っていた。

花梨
「黒っ！！」
太陽
「うるせぇ！？お前もさっさと着替えて来いよ！？」
花梨
「はいはーい」

ウルル姫は、太陽を下から上までじっくり見ていた。

太陽
「なっなんだよ？（照」
ウルル姫
「黒っ！！」
太陽
「うるせ！さっさと邪丸と龍と合流しようぜ」
ウルル姫
「あぁわかった・・・マッチこれは・・・あれか？」
マッチ
「・・・はい」
太陽
「？」

マッチ
「お値段の方は　あれ　なので、ヨッチには内緒でタダにしておきま」
謎の声
「ちょっとまてぇぇぇぇ!!!」

と、同時に上から大きな声と共にマッチとそっくりな顔をして背丈も同じくらいで、マッチとは逆に左耳に青色の宝石の入ったイヤリングをして、マッチとは違うパターンの服を着ている少女が落ちてきた。

マッチ
「ヨッヨッチ!?」
ウルル姫
「おぉ久しぶりじゃなぁ」
ヨッチ
「久しぶりだなぁ。　さて、マッチ　タダとはどういう事だ?ウルルのはタダでいいが、その者達がなぜタダなのだ?」
マッチ
「こっこの人達は、あれなんだよ!!あれ!!」
ヨッチ
「あれ?・・・あぁあれかだが、その者達が本当にあれに相応(ふさわ)しいか確かめる必要もあるようだな。」
太陽
「あれ?あれってなんだよ?それと確かめるって?」
ウルル姫
「後で説明する」

と冷静にそう答えた。

花梨
「何が始まるの？」
ヨッチ
「行ってからのお楽しみだわ」

そうヨッチは、すごく楽しみな顔をして、ポケットから取り出したスイッチを押した。
その瞬間太陽と花梨は、フッと床に開いた穴に落ちていった。

太陽と花梨
「うわぁ――――――！！　キャ――――――！！」

薄暗い穴の奥へ二人は落ちていった。

マッチ
「大丈夫かなぁ。。。？」
ウルル姫
「あやつらをなめるなよ？」
ヨッチ
「かなりの自信だな。あっひゃっひゃっひゃっ！！」

と言い残し店の奥へ消えて行った。

ウルル姫
「ふっ」

軽く笑みを浮かべて後に奥へ消えて行った。

～第三話～腕調べへ（後書き）

へー一先ずこれからかなり伸び伸びと書くつもりなのでよろしくお願いします。

～第四話～そして試練（前書き）

太陽・花梨は穴へ落とされ、
邪丸は村を歩いていた。

今度はどんなストーリーが彼らを待ち受けているのだろうか。

～第四話～そして試練

酒場の前を歩いていた。

邪丸
「ちょっと入ってみるか」

カランカラーン

陽気な店員
「らっしゃーい！！客さんー、今ビール一気飲み大会で盛り上がってるんですがどうっすか？」
邪丸
「おっ俺はまだ未成年だしなぁ・・・」

と呟いた。

陽気な店員
「お一人様参加ー！！」
邪丸
「え？ちょっちょっと」
酒場の人達
「よっしゃっーこっち来いこっち！！

薄暗い洞窟の中で少年は仰向(あおむ)けになって倒れていた。
どうやら上の方から落ちてきたらしい

太陽
「痛ててて・・・こっここ何処だ？」
左右後方は壁で前方に一本だけ道があった。
太陽
「あれ？花梨？花梨何処だ！？」
花梨
「太陽？そっちにいるの？」
左の壁の向こうから声がした。
太陽
「ああいるよ　大丈夫か？」
と、左の壁をさすりながら答えた。
花梨
「大丈夫。一本道があるんだけど進めって事かなぁ？？」
太陽
「恐らくね。あのヨッチとかふざけた野郎め、脱出したら覚えてろよ！！」
右手に拳(こぶし)を当てながらそう呟いた。
花梨
「それじゃぁまた後でね。」
太陽

「わかった。」

壁にはところどころ火の灯ったランプが掛けてあった。

太陽
「はぁーあぁ」

ソウルコンデンションの太刀を片手で持ち上げ、眺めながらゆっくり歩いていた。

太陽
「はぁー暇だぜ、一人となると余計暇だよ。」

謎の声
「うるせぇーなぁ！黙って歩けよ」

頭の中で誰かにそう言われた。

太陽
「だっ誰だ！？」

そう叫び手に持っていた太刀を構えた。

謎の声
「んじゃぁちょっと遊ぶか？」

太陽
「え？」

その瞬間、目の前に雲一つない快晴な空に大きな太陽が浮かんだ草

原が現れた。風が気持ちい川が流れている音もする。

太陽
「気持ちい・・・」

今までの事は全て頭から消えてその場に倒れた。

謎の声
「はっはっはっはっ！！お前面白いな！！」
太陽
「誰だっ！？」

そこには、自分とそっくりな少年が立っていた・・・だが、どこか違う髪の毛は銀髪で服は黒ではなく白、自分とは真逆のようだった。

謎の少年
「だっだっ誰だって・・・俺はお前でお前は俺だよ、なっ！？わかるか？」

少し驚いたそぶりを見せて、自分に理解させようと話してきた。

太陽
「何言ってるんだ？」

と、言い手探りで太刀を探した。

謎の少年
「何探してるんだ？言っただろ？お前の半分は俺なんだよ。だから、太刀なんてないんだよ！！俺達が合わさって太刀になるんだ！！」
太陽

「訳のわかんねぇ事ばっか言いやがって！！うぉ――――」

手探りでやっと見つけた太刀を振り上げて向かって行った。

太陽
「はぁっ！！　　！？」

ガキンッ

振り下ろした太刀は少年の刀によって塞がれた。そして、振り下ろした太刀は太刀ではなく細く長い刀だった。

太陽
「お前っ何をした！？」

謎の少年
「だから言っただろ？お前は俺なんだ・・・力を貸して欲しい時は刀を抜けよ。俺達は二人が合わさって俺になれるんだ。なっ！？わかるか？」

その瞬間世界が戻った、洞窟で太陽は倒れていた、起き上がると景色は元に戻っていた。

太陽
「夢・・・か？」

太陽は太刀を見た・・・だが、もう太刀ではなく細く長い刀だった。

太陽
「雨竜刀（うりゅうとう）が・・・」

無意識にそう呟いた。

太陽
「えっ！？」

とっさに口を押さえた。頭で文字が浮かぶ。

「俺もいるんだぜ？二人で一人だ」

そして、その場に跪(ひざまず)き刀に手を添えた。その瞬間、太刀へとまた変わった・・・太陽はしばらくその場で座りこみ休む事にした。
まだ、忘れられないあの言葉。

「お前の半分は俺なんだよ。だから、太刀なんてないんだよ！！俺達が合わさって太刀になるんだ！！」

太陽
「おっ俺は・・・」

太陽はしばらく目を閉じた。

一人薄暗い洞窟を歩いていた。

謎の声
「ソウルコンディションは、使わないの？」
花梨

「えっ！？」

薄暗い洞窟の中で突然声がして花梨は振り返った。だが、声がした方向は自分の心だった。

謎の声
「教えてあげる」

目の前に、自分に良く似た少女が立っていた。

地響きがして太陽は飛び起きた。

太陽
「何か来る・・・」

ゆっくり後ずさりした。
やがて、広い空間に出た。前方からは、うなり声が聞こえた。
そして、姿を露(あらわ)にした。

太陽
「！？」

黒い巨体に手が2本足2本、長い尾の先は大きく膨らみハンマーのようになっている。ところどころから鋭く尖った刃(やいば)が出ている。黒い頭はティラノサウルスを思わせるように大きく、頭から背中、尾まで一直線だ。頭の先に刃が付いている。

魔物
「グギャァ――――――！！」
太陽
「くっ　なんだこいつ！？」
すかさず刀を構えた。光を放って太刀へと変化した。
謎の少年
「ＳａｕｓｕＴｙｎｏｒａｎＸ　サウスティノランクス・・・ＳＴＸと呼ばれている。鬼火を使う・・・気を付けろ！」
目の前に現れてそう語った。
太陽
「！？・・・」
太陽はかすかに笑った。
太陽
「俺とお前で一つだろ・・・？」
謎の少年
「！？　あぁ」
太陽
「来いよ・・・」
手を差し伸べた。
謎の少年
「何を考えている？」
太陽

「戦いで　てめぇを使う」
謎の少年
「貴様にかける」
ＳＴＸはうなり声を上げた。

～第四話～そして試練（後書き）

やっと魔物もでてきましたね。（笑）
やっとやっと戦いです。（涙）
魔物の名前は・・・まぁ単純に考えました。
わかった人とかは感想などで言ってもらえると嬉しいです（笑）ヒントは文章中の動物（？）の名前とXは無しと考える事ですね。次話もお願いします。

～第五話～抜け殻（前書き）

洞窟で待ち受けていたのはなんと大きな怪物だった！！
ＳａｕｓｕＴｙｎｏｒａｎＸと呼ばれる大きな怪物が太陽の前に立ちふさがる・・・

～第五話～抜け殻

魔物・・・ＳＴＸと二人は薄暗い洞窟の中で睨み合っていた。

謎の少年
「戦いで俺を使うって・・・どおゆうことだ？」

冷や汗を垂らしながら、疑問に思った顔で太陽を横目で見た。

太陽
「まぁ見てろって　えっ・・・えとぉ・・・」

謎の少年
「俺か？俺は・・・ただの抜け殻さっ・・・」

無理矢理笑みを作って、冷や汗を拭(ぬぐ)いながら答えた。

太陽
「なっなんだよ・・・」

ＳＴＸ
「グギャァ――――――！！」

ものすごい唸(うな)り声を上げて突撃の構えをとった。

謎の少年
「あいつはそんなに待ってくれないみたいだぜ？まぁＣａｓｔ－ｏｆｆ　ｓｋｉｎ・・・スキンと呼んどけ・・・」

太陽
「よっ呼んどけってお前・・・」

ドッドッドッドッドドドドドドドドド――――――

突然ＳＴＸこと・・・ＳａｕｓｕＴｙｎｏｒａｎＸ―サウスティノランクスが、二人めがけて突撃してきた。

ＳＴＸ
「ギャァ――――――――！！」

太陽
「！？」

スキン
「びびってちゃなんもできないぜっ？」

太陽
「うっせぇな！？やりゃいいんだろっ！？」

太陽は雨竜刀を構えた。

太陽
「いくぜっ！！」

スキンの肩に太陽は右手を乗せて、目を閉じた。

スキン
「おいっ馬鹿っ！！ＳＴＸがもうすぐそこにっ」

そう叫んだ瞬間スキンの体が火の玉になった。

太陽
「イメージした通りだ。」

火の玉になっているスキンが叫んだ。

スキン
「イメージ通り？」
太陽
「まぁ見てろ・・・」

太陽の表情が変わった・・・

太陽
「ハァ――」

辺りの空気が重くなり、気が静まりかえった。
ＳＴＸは壁を尾で削りながら走ってきている。

太陽は手に乗せている火の玉・・・スキンを雨竜刀に押し当てた。
温かい光が辺りを包んだ。

光が消え去った後・・・太陽の手には大きな太刀が握ってあった。

太陽
「双流雨竜刀（そうりゅうりゅうとう）・・・」
ＳＴＸ
「グギャァオ」

ＳＴＸは身体を大きく曲げてハンマーのような尾で攻撃してきた。
雨竜刀から声がしたような気がした。

「荒雨流（あらさめりゅう）・・・」

太陽
「荒雨流・・・・・・五月雨（さみだれ）！！」

雨竜刀が一瞬何倍にも大きく見え、荒く5回斬りつけた。

ＳＴＸ
「ウギャヤ――――！！」

ＳＴＸはその場でよろめいたが、口を大きく開けた。

また、声が聞こえた。

「やばいっ鬼火(おにび)だっ！！炎系最大技とされている、お前じゃまだ無理だっ避けろっ！！」

太陽
「やっぱその声はスキンか・・・避ける？真正面で受け止めてやるぜ。」

「五月雨じゃ無理だっ！諦めろっ！」

太陽
「へっ・・・」

雨竜刀を構えた。

ＳＴＸは2本の手の先の大きな爪で、身体をしっかり地面に固定するため地面を握るようにした。
周りの空気がＳＴＸの口に吸い込まれていく。

スゥ――――

ドンッ

大きな音と共に小さな火の玉が発射された。

太陽

「あれがか！？」

「油断するなっ！？」

ヒュン

太陽の横を鬼火が去っていった。

「鬼火は威力がありずぎるから座標が定まらないんだ。」

ドガ――ン

後ろの方でもの凄い爆発音がした。

太陽

「うぇ！？」

「次が来るぞっ！？気をつけろっ」

スゥ――――

ドンッ

太陽は雨竜刀を真上にかざした。

太陽
「はぁっ！！荒雨流・・・盾雨（じゅんう）・・・流（なが）れ雨（あめ）！！」
勢いよく刀を振り下ろした。振り下ろした空間の裂け目から鋭い雨が壁を作った。

ジュッ
鬼火は瞬時に冷めた。

太陽
「矛雨（ほこう）・・・流（なが）れ雨（さめ）！！」

刀を横に大きく振り空間から鋭い雨がＳＴＸ目掛けてとんだ。

グギャァ――！！
ＳＴＸはその場に倒れた。
ＳＴＸの身体がパリパリと破けるような音を出して、少しずつ消えてゆく・・・

太陽
「なっなんだこれ！？」

目を大きく見開いて驚いた顔で、消えてゆくＳＴＸを見ていた。

太陽
「おいっなんなんだよっこれっ！？なぁスキン！！」

スキン
「抜け殻・・・」

冷たい空気の流れる洞窟の中で、二人は消えゆくＳＴＸを見ていた。
スキンが放った言葉・・・抜け殻とは何を意味するのか・・・
太陽はこの先何が起こるのか知るはずもなかった。
この世界・・・スピリットワールド全ての者は、人間界で死んだ者
の巣くう世界だということを・・・

～第五話～抜け殻（後書き）

前話とかなり時間が空いてしまいました（ノ∀、＊）すみません。
色々やりたい事があって全てが詰め込めなくて^^；
次話もどうぞよろしくお願いします。

～第六話～脱出（前書き）

やっとこさでＳＴＸを倒し新たな力でこれからだって時に・・・
スキンからある事を告げられる・・・

～第六話～脱出

薄暗い洞窟の中で二人は、口論していた・・・

太陽
「なんだよ抜け殻って！？」

スキン
「この世界は・・・全てが・・・」

目から軽く流れた涙をスキンは拭った。

スキン
「全ての者は・・・Ｂｏｄｙ－ｓ――バディーズの抜け殻なんだ・・・」

太陽
「バディーズ？なぁ全て話してくれよ・・・俺達が此処へ連れてこられた理由を・・・」

スキン
「それは・・・お前らが」

洞窟の少し明るいところで彼女は誰かと笑っていた。

花梨
「はっはっはっはっ！！」

謎の少女
「あんた男みたいな笑い方するな・・・」
花梨
「でもスッキリしたわー！！」

彼女達の後ろに何体もの怪物が倒れていた。

花梨
「洞窟も明るくなってきたしそろそろ出口かなー？それと名前教えてよー」
謎の少女
「だから！！スキンでいいって言ってるでしょ！！」
花梨
「それ本当の名前じゃないでしょー」

とほっぺを膨らまして言った。

謎の少女
「スキンでいいから・・・ほらっそろそろ出口でしょっ！さっさと行くよ！！」
花梨
「はーい・・・でもさぁなんであなた私と似てるの？」

少女は少しうつむいた・・・

謎の少女
「・・・洞窟から出れたら教えてあげるよ」
花梨
「んじゃぁ競走ねっ！」
謎の少女

「えっ！？」
花梨
「よーい・・・ドンッ！！」
謎の少女
「わっ！？」
二人は勢いよく走り出した。

邪丸
「プハァ――！」
真っ赤な顔をした邪丸は１０本目のジョッキを、飲み干したところだった。

謎の男
「あんちゃんやるなぁ・・・」

その男の後ろには大きな太刀が椅子に立て掛けてあった。
男の右腕からは機会の音が聞こえる。
フードで顔を隠していたので顔は良く見えない・・・

邪丸
「ぁん！？」
謎の男
「お前さん・・・この世界の者じゃないだろ？」
邪丸

「え！？」

邪丸の酔いが少し覚めた。

謎の男

「この世界に興味があるだろ・・・？」

謎の男はにやけ顔で聞いてきた。

邪丸

「・・・」

謎の男

「この世界を知りたいだろ？」

邪丸

「・・・」

邪丸はうつむいていた。

謎の男

「一度死んだ者・・・」

邪丸

「ッ・・・！？」

謎の男

「会えるなら会いたいか？」

邪丸は謎の男の顔を見た。

謎の男

「私と来れば生き返らせれるかもしれんぞ・・・」

邪丸

「！？」
謎の男
「母親に会いたくないか？」
邪丸は何も声が出なかった。
謎の男はフードから顔を少しだして、にやけ顔でこう告げた。
謎の男
「生き返らすには・・・条件がある」

ウルル姫
「そろそろか・・・龍準備はいいな？」
我流氷龍剣を構えた龍が答えた。
龍
「ＯＫです。マッチ、ヨッチ」
マッチ＆ａｍｐ；ヨッチ
「ＯＫＯＫ」
龍
「そろそろか・・・」
洞窟の奥から走ってくる音が聞こえた。
ウルル姫
「来たっ！」

花梨
「ゴ――――――ル！！！」
謎の少女
「はっ速過ぎだよっ！？はぁはぁはぁ」

龍は大きく氷龍剣を構えた

龍
「水鉄晶（すいてっしょう）・・・氷結（ひょうけつ）！！」

謎の少女目掛けた氷の波が襲った。

花梨
「キャッ！？」
謎の少女
「クッ！？」

謎の少女は花梨を端の方に投げた。

謎の少女
「キャァ――――――！！」

一瞬にして謎の少女は氷の波にのまれた。
花梨はどうやら頭を打って気絶している。
氷の波がカチコチと固まってゆく・・・

龍
「すまんな・・・だが・・・所詮お前らは抜け殻のスピリットにしかすぎない・・・」
ウルル姫

「太陽の分もあるんだ急げ」
龍
「はいっ！」
マッチ＆ａｍｐ；ヨッチ
「この子第一護封所に運べばいい？」
二人がかりでカチコチに固まった謎の少女を持ち上げながら聞いた。
龍
「んっ？あぁ」
ユラッ
一瞬空気が変わった。
ウルル姫
「んっ！？霊気だっ！！かなり強いしかもっ洞窟からだっ！ＳＴＸかっ！？」
奥から足音が聞こえてきた・・・
タッタッタッタッ
静かに足音は止まった・・・
謎の男の子
「ウォリヤァ――！！」
突然大きな声と共に大きな太刀を振りかざして、龍目掛けて突進してきた。

龍
「！？」

ガキンッ

とっさに龍は剣で防いだ
よくみると彼は太陽だった・・・

龍
「太陽！？」
太陽
「龍！？なにやってんだよこんな所でっ！！」
龍
「お前こそいきなりなんだよっ！？」
ウルル姫
「それより貴様その霊気・・・」

ウルル姫が目をまん丸にして太陽を指差して言った

太陽
「んっ！？　あっそれより今追われてるんだった！！」
龍
「えっ！？」

ドンドンド――――ン

と大きな足音を鳴らしながら、洞窟の奥から普通のＳＴＸの３倍くらいもの怪物が現れた。

ウルル姫
「ッ！？なんだこいつはっ！！」
太陽は拳(こぶし)を握った
太陽
「龍・・・いっちょやるかっ！！二人ならなんとこいける！！」
龍
「あっあぁ・・・お前の新しくなった力みてやるっ！！」
太陽は自分の影に手を翳(かざ)した・・・
太陽
「いくぞっＮｕｘ―ナクス！！」
突然影からナクスと呼ばれる者が現れた。
だが彼は以前太陽にスキンと呼ばれていた者であった。
ナクス
「またかっ　でかいなこいつはっ！！」
龍
「ぬっ抜け殻かっ！」
だが、龍のはなった言葉は太陽には聞こえていなかった・・・
太陽
「はっ！！」
ナクスの姿形(すがたかたち)は火の玉に移り変わり・・・
手の上に浮かぶ火の玉は太刀の中へ吸い込まれた・・・

太陽
「いくぜっ！！バケモン！！ウォリヤァ――」
太陽は太刀を大きく振り上げた
太陽
「双刀流（そうとうりゅう）・・・」
太刀が二つに割れた・・・
太陽
「てめぇに俺の強さみしてやるっ！！」
そう言い放ち怪物に向かっていった・・・

～第六話～脱出（後書き）

ご愛読ありがとうございました。
目痛いですががんばりますっ（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3854c/

IN SOUL OF

2010年10月24日03時59分発行